

甲府盆地一円と長野県佐久盆地・茅野地域の弥生時代後期の繋がり

小 山 岳 夫

1 はじめに

山梨県甲府盆地と長野県茅野地域には、弥生時代後期に類似する中部高地型櫛描文土器が分布する。その源流は佐久盆地の後期弥生土器にある可能性が笹沢浩⁽¹⁾などに指摘されていたが、具体的な実証作業は行われて来なかった。

本稿の目的は、後期弥生土器の分析をして、山梨県、長野県茅野地域・佐久盆地の繋がり进行を明確にすることである。

2 長野県の後期弥生土器概観

(1) 概要

長野県各地域、山梨県、群馬県でそれぞれ後期弥生土器の編年が組まれている。佐久盆地の編年も最近になって私がリニューアルを試みた⁽²⁾。

各地の編年について私の独断で併行関係を検討した結果が表1になる。本稿はこの併行関係を用いて甲府盆地、長野県諏訪地域・佐久盆地の比較を試みる。

表1 土器編年併行関係表（長野県各地と樽式・金の尾式を対比）

時期		群馬県 樽式	群馬県 南蛇井増 光寺遺跡	山梨県 金の尾式	長野県										隣接地域交流																											
					佐久盆地	長野盆地 南部	長野盆地 北部	諏訪湖南 部	松本盆地	上伊那・諏 訪湖北部	岡谷市 橋原遺跡	上伊那南部	飯田盆地	甲府・茅 野への移 入	佐久への 移入	甘楽富岡 への移入	茨城県 との交 流																									
弥生後期	前葉	1期	(若狭徹・飯島克己1980)	金の尾Ⅰ式	1段階	Ⅰ期	2段階	Ⅱ期	3期	Ⅲ期古	Ⅳ期新	Ⅳ期古	Ⅳ期新	Ⅰ期古	2008 (富沢一明)	北平4期 (青木一男1996)	3段階	Ⅴ	5	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ段階	佐久系箱清水式の移入	吉ヶ谷式の移入	佐久系箱清水式と吉ヶ谷式の移入	王台式の移入															
	2期	1段階																										Ⅲ期新	5段階	1段階	Ⅳ	Ⅲ新	Ⅲ古	2新	ⅠⅡ	ⅠⅡ	Ⅳ段階Ⅴ段階	Ⅵ段階	Ⅶ段階	Ⅷ段階	Ⅸ段階	
	3期	2期																										2段階	Ⅲ期新	5段階	1段階	Ⅳ	Ⅲ新	Ⅲ古	2新	ⅠⅡ	ⅠⅡ	Ⅳ段階Ⅴ段階	Ⅵ段階	Ⅶ段階	Ⅷ段階	Ⅸ段階
	4期	3期古																										3期新	Ⅳ期古	Ⅳ期新	Ⅰ期古	2008 (富沢一明)	北平4期 (青木一男1996)	3段階	Ⅴ	5	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ段階		
		中葉	(大木紳一郎1997)	金の尾Ⅱ式	1段階	Ⅲ期新	Ⅳ期古	Ⅳ期新	Ⅰ期古	2008 (富沢一明)	北平4期 (青木一男1996)	3段階	Ⅴ	5	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ段階	佐久系箱清水式と吉ヶ谷式の移入	吉ヶ谷式の移入	佐久系箱清水式と吉ヶ谷式の移入	王台式の移入																				
後葉	3期	3期古																					3期新	Ⅳ期古	Ⅳ期新	Ⅰ期古	2008 (富沢一明)	北平4期 (青木一男1996)	3段階	Ⅴ	5	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ段階							
		古墳前期	4期	-	Ⅰ期古	2008 (富沢一明)	北平4期 (青木一男1996)	3段階	Ⅴ	5	Ⅵ	Ⅶ	Ⅷ	Ⅸ段階																												
		樽式	金の尾式	吉田・箱清水式	橋原式	座光寺原・中島式																																				

長野県の後期弥生土器は、南信飯田盆地を中心とする地域の座光寺原・中島式、北信長野盆地を中心とする地域の吉田・箱清水式があり、すでに中期中・後葉からそれぞれ独自性のある土器様式である北原式と栗林式を創出する。北原式は東三河の長床式、栗林式は北陸の小松式の影響を受けて成立したと推定され、栗林式は千曲川流域、中信一帯、群馬県など広い分布範囲を持つものに対し、北原式の分布範囲は狭い。栗林式はさらに新潟県で小松式と、山梨県では有東式と混在して集落を形成している。

これが後期になるとさらに異なった土器様相となる。

南信飯田～上伊那南部には座光寺原・中島式が分布している（図3）。中葉前後の時期に特有の内折する受口状口縁をもつ壺、口縁部が短く屈曲外反する甕が確立される。文様は壺・甕共に円弧文や単線文など短く刻む文様を周回させる特徴がある。

北信の吉田・箱清水式土器は、中葉からは長野・上田・佐久の千曲川流域、松本、茅野、甲府などに分布する（図3）。

北信長野盆地では中葉前後の時期に赤色塗彩された壺が主流となり、中葉後半以降は胴部下半が屈曲する形態が定着する。これは東信佐久・上小盆地を含めた千曲川流域に共通する。甕は中島式と対照的に口縁部が長く外反する。文様は、北信においては口縁・胴部に櫛描波状文、頸部に簾状文がほとんどだが、東信佐久盆地では口縁・胴部に櫛描横羽状文を施すことが多いのが特徴である。

南北両極に位置する土器様式の狭間にあたる南信諏訪～上伊那盆地では、中葉から南北の折衷様式の橋原式が成立する。

（2）前葉における南信の土器（多段帯状文系土器）の松本盆地以北への進出

弥生時代中期後半の栗林期、北原期においては北の栗林式土器の分布範囲が圧倒的に広い状況であった（図1）。

これが後期前葉になると南信の分布範囲が北信と拮抗する状態になる（図2）。栗林式の分布圏であった中信の松本盆地は、南信由来の多段帯状施文系土器が席卷し、さらに北の町地域でも多段帯状施文土器が吉田・箱清水式土器と融合する状況が見て取れるようになる。

この時期、塩尻市柴宮銅鐸、松本市宮渕銅鐸など三遠式銅鐸が松本盆地へ進出している。これは多段帯状施文土器が長野県の中央部の奥深くまで侵入する状況と無関係でないと私は考える。

（3）前葉から中葉における佐久の地域色の創出と「佐久系箱清水式」

長野盆地の後期中葉は胴下半部の括れが明瞭化した赤彩壺、有段口縁赤彩高坏の出現・定着、甕の器形統一化など典型的な箱清水式土器の確立～安定期である。

一方、佐久盆地の土器もこれと基本的な枠組みでは一致するものの、前葉にへう描矢羽根状文の赤彩壺（図6-2）、中葉は甕の櫛描横羽状文（図3-5）が登場し、以後当地域の壺・甕の主体的な文様となり、古墳時代前期まで継続する。壺・甕の文様に異なる要素が見いだせるこれらの佐久盆地の弥生後期土器群をここでは「佐久系箱清水式」と仮称する。

（4）中葉における南信の土器の後退と橋原式の成立

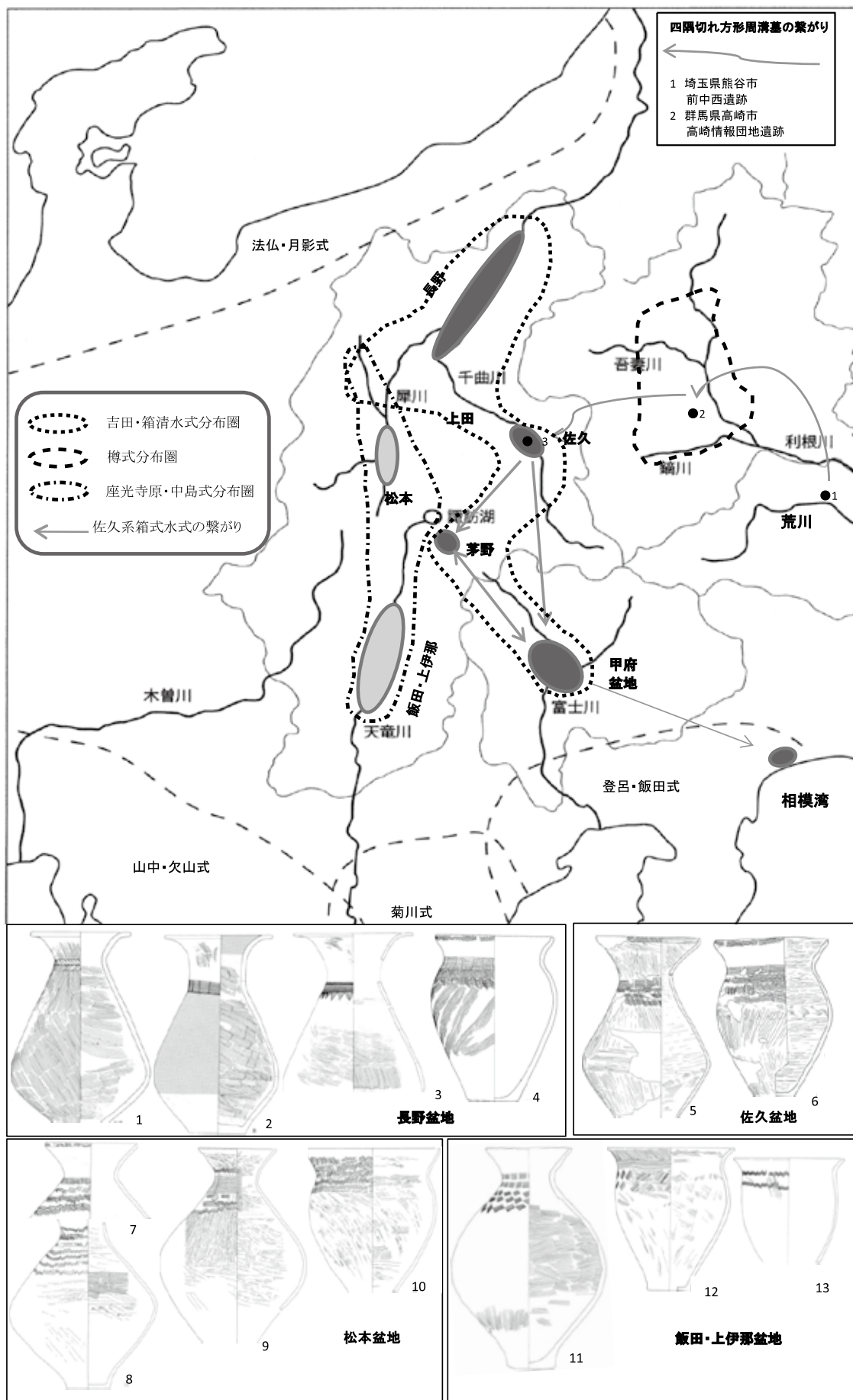
中葉になると松本盆地では多段帯状施文系土器が後退し、代わって箱清水式土器が進出する（図3）。北信に端を発する土器の分布範囲拡張に押されて、南信由来の土器が後退を迫られたような状況になる。橋原式土器はこうした南北のせめぎ合いの渦中で、南北両者の要素を取り入れて成立したと考えたい。

橋原式の範囲

飯田市の山下誠一は伊那市の黒川・三峰川を隔てて北側に橋原式、南側に座光寺原・中島式土器の分布圏が形成されるとみている⁽³⁾。橋原式分布圏の南端は山下の指摘通りで、北端については私は諏訪湖南部の諏訪市大安寺遺跡で橋原式土器が確認される⁽⁴⁾ことから諏訪湖盆一円を想定している。

橋原式の内容

壺は座光寺原・中島式の色彩強く特有な内折する受口（図3-11）と素口縁があり、素口縁は多段帯状施文系が多い。壺はいずれにしても南信的であるのに対し、甕は口縁部が長く外反する吉田・箱清水式的な器形（図3-12）で



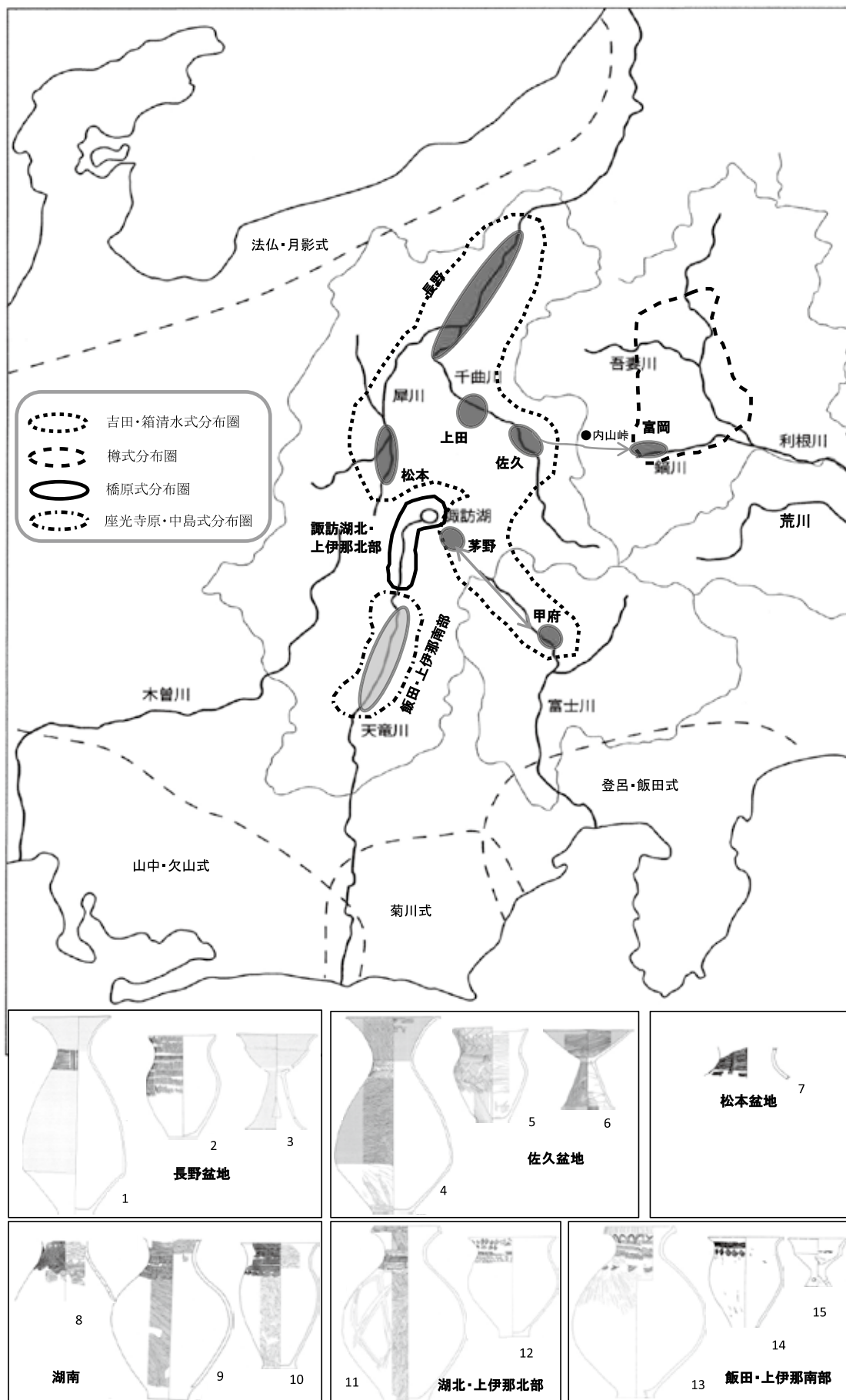
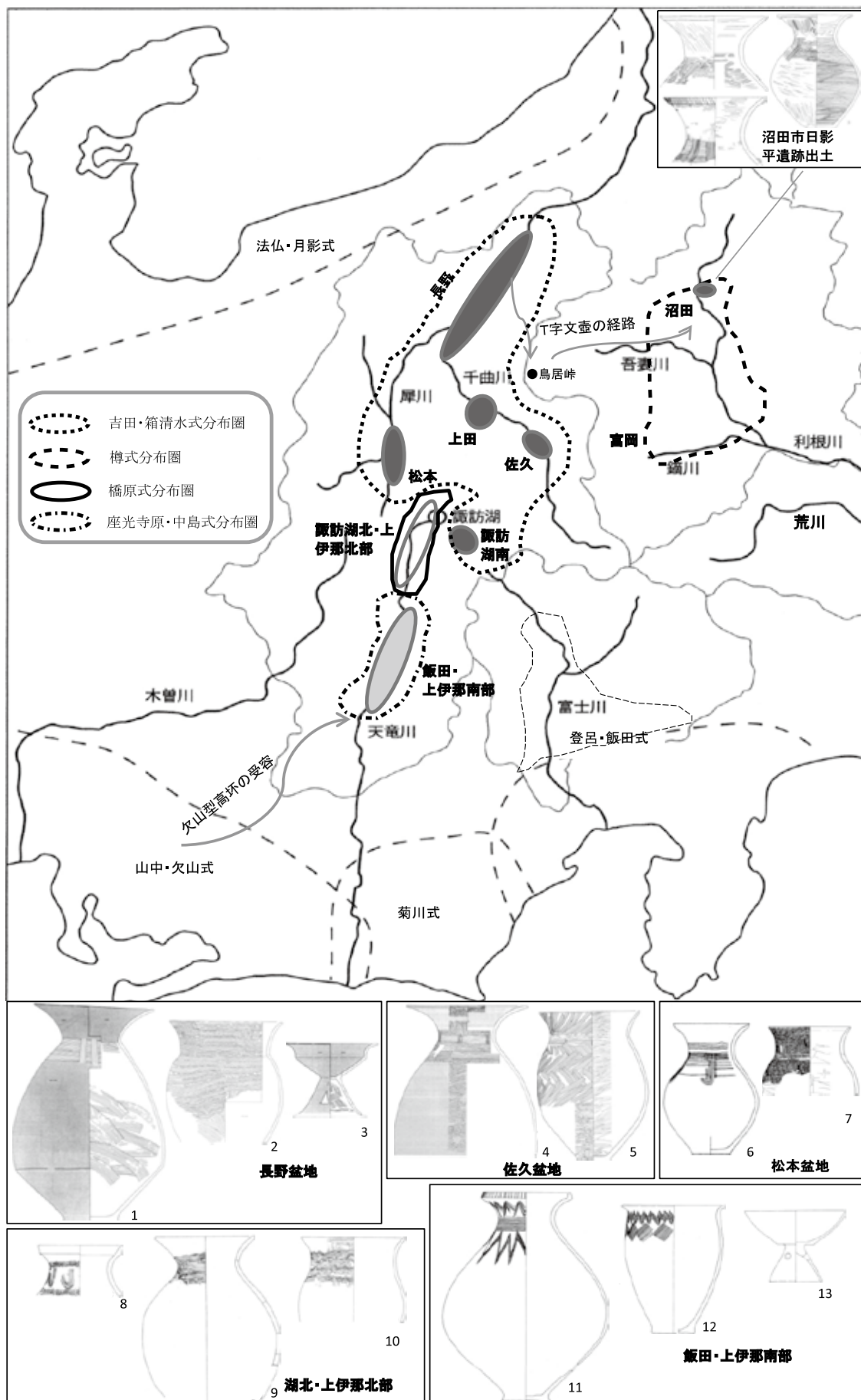


図3 後期弥生土器の地域色（後期中葉）



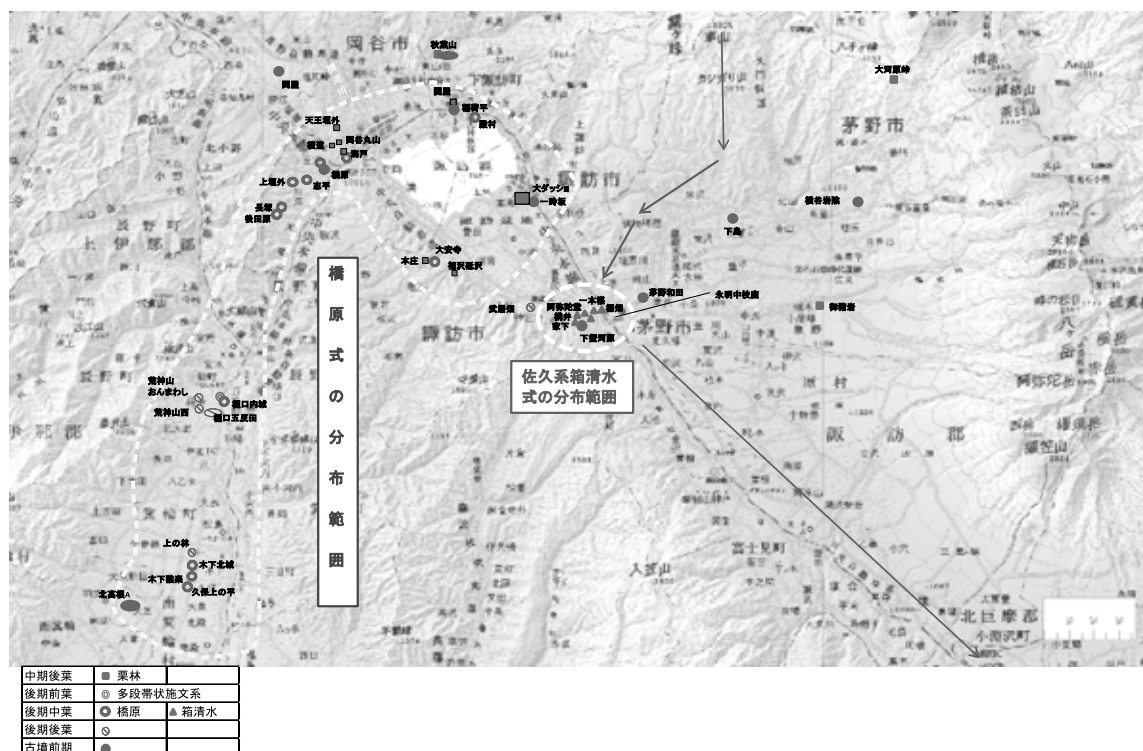


図5 諏訪盆地と上伊那盆地の弥生中期後葉～後期、古墳時代前期の遺跡分布

ある。

これらの諸相から折衷様式と呼ぶに相応しい。

橋原式の時期幅

報告書刊行時は、後期前葉から後葉まで長い時間幅を持つと漠然と考えられていたが、多段帯状施文の壺を見ると胴部の張りが上方に移るなど形式的に新しく、甕の形態も前葉のものとは異なるため、私は中葉以降に位置づけている（表1）。

中葉では座光寺原・中島式の要素が優勢、後葉は箱清水式の要素が優勢となる。

3 佐久系箱清水式の茅野地域への進出と定着

(1) 後期前葉の進出

従来、諏訪盆地から上伊那盆地北部は、漠然とではあるが、後期前葉は多段帯状施文系土器、中葉以降は橋原式の分布域と考えられていたと思う。しかし、1980年代から茅野市教委で構井・阿弥陀堂遺跡の調査で箱清水式が出土し、1990年代の家下遺跡でも箱清水式土器が主体的に出土したことにより、茅野地域に箱清水式が主体的に分布していることが決定的になった。この様相を明らかにしたのが小池岳史である⁽⁵⁾。

私は佐久盆地における後期前葉（佐久後期Ⅱ期）の集落数・規模の拡大⁽⁶⁾に伴い、橋原式の成立に先んじて多段帯状施文系土器の空白あるいは希薄地である茅野地域へ佐久系箱清水式が南下して、小地域を形成したと仮定している。

南下した理由については不明だが、気候は中期末における寒冷化から上昇傾向にあった時期と思われる⁽⁷⁾。気候温暖化に伴い佐久盆地の弥生集落が膨張した結果、人口流出した可能性もある。

以下に佐久盆地から茅野地域へ佐久系箱清水式土器が移入したと仮定するにいたった根拠を述べたい。

茅野地域でのへう描矢羽根状文を持つ壺の存在

茅野市家下遺跡ではヘラ描矢羽状文をもつ壺（以下「矢羽状文壺」とする）が出土している（図6-3・4）。

小池岳史はこれを後期前葉（諏訪湖南部後期Ⅱ期）に位置づける。佐久盆地でもこれと形態・文様が類似する矢羽状文壺（図6-2）が後期前葉（佐久後期Ⅱ期）に登場するが、まずは佐久盆地以外の地域で出土している矢羽状文壺と家下遺跡出土品を比較してみる。

長野盆地では長野市吉田高校グランド遺跡出土資料中に矢羽文壺が見られる（図6-11）。これは吉田式土器でも古段階＝青木1段階の組成中にあり、複数帯のヘラ描き直線文、所謂T字文B（櫛描直線文をヘラ描スリットで刻む）、櫛描簾状文＋波状文など多様な文様と共に存在する壺である。この時期は壺の頸部文様に多様性が認められ、無彩品が多い。

吉田高校グランド遺跡の矢羽状文壺は文様帯の幅が狭く、プロポーションは口縁部が短く、胴部の重心（最大径）がより下位にあるなど栗林式の壺の文様帯と器形を継承していることは明らかであり、茅野地域の矢羽状文壺よりも型式的に先行する。この矢羽状文壺は長野盆地以外の地域では未確認であることもあり、茅野地域へもたらされていた可能性は低い。

これに後続する後期前葉の後半（青木第2段階、佐久後期Ⅱ期、諏訪湖南Ⅱ期⁽⁸⁾）では長野盆地とともに佐久盆地、茅野地域で矢羽状文壺が見られるようになる。

北信では中野市栗林遺跡14・17住で矢羽状文壺が出土しているが、矢羽状文が2段構成で茅野地域のものとは異なる。長野市塩崎・ニツ宮遺跡等でも矢羽状文壺が見られるが、全容がつかめない断片的な資料が多く、茅野地域のものと比較しづらいが、文様帯の幅は狭く茅野地域のものとは異なっているようだ。

佐久盆地では後期Ⅱ期にヘラ描矢羽状文が出現し、主文様としての位置を確立し始める。赤彩品が多いのも特徴である。佐久盆地の矢羽根状文壺と諏訪湖南Ⅱ期の茅野市家下遺跡出土品と比較してみると前述のように文様帯の幅、プロポーションにおいて強い類似性がある。時期的にも併行するとみてよい。ただし、家下遺跡の矢羽根状文壺は、先端が丸い棒状工具を用いて、佐久盆地の金属的な鋭利な工具とは異なること、佐久では赤色塗彩するが、茅野では赤色塗彩されていないことから佐久からの搬入品でないことは明らかである。家下遺跡の矢羽状文壺は文様構成・形は佐久と同じものを作りたいという意志を感じるが、金属製の工具や赤色顔料の欠如などから完璧なコピーは作り切れなかった製品と見ることができる。家下遺跡の矢羽状文壺の作り手は、佐久盆地の矢羽状文壺の制作技法を学んだ経験のある人であった可能性が高い。

以上、回りとどく矢羽状文壺を比較検討してきたが、上述の様相から見ても茅野地域における矢羽状文壺は、後期前葉（佐久Ⅱ期）に佐久盆地の影響の下、茅野地域へ伝わった可能性が高いと私は見ている。

ちなみに大門街道、県道41号を経由すると佐久から茅野は約60kmであるが、長野から茅野への距離は松本・塩尻を経由して106km、上田を経由するルートで103kmあり、地理的な状況からも弥生時代後期前葉における佐久盆地・茅野地域の親縁関係の強さを感じる。

甲府盆地でのヘラ描矢羽根状文を持つ壺の存在

矢羽根状文壺は甲府盆地でも出土している（図6-9、写真1）。佐久―甲府間の道程は国道141号ルートで約90kmの距離がある。

甲府市塚本遺跡や音羽遺跡で出土している矢羽根状文壺で全容のうかがえるものはないが、相伴する土器組成から佐久後期Ⅱ期に併行する資料と見てよい。矢羽根状文の施文具を実見したところ、茅野地域家下遺跡とは



甲府市塚本遺跡3住
(甲府市教育委員会掲載許可済)



佐久市西一本柳遺跡Ⅲ117住
(佐久市教育委員会掲載許可済)



茅野市家下遺跡
(尖石考古博物館掲載許可済)

写真1 甲府・佐久・茅野の矢羽状文の比較











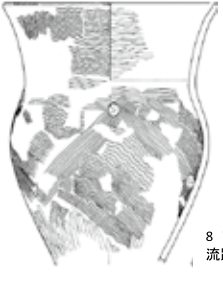






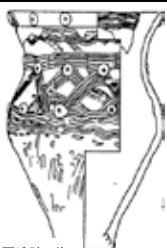
	佐久地域	茅野地域	甲府盆地
へら描矢羽状文壺	 <p>1 西一本柳Ⅲ 60住</p>  <p>2 西一本柳Ⅲ 117住</p>	<p>移入</p>  <p>3 家下 流路</p>  <p>4 家下 流路</p>	 <p>9 音羽 4土坑</p>  <p>10 塚本 3住</p>  <p>参考 長野盆地 11 吉田高校グランド6住</p>
斜状文甕の展開	 <p>5 西一本柳Ⅲ 1住</p>  <p>6 西一本柳Ⅲ 32住</p>	<p>移入</p>  <p>7 家下 3土器棺</p>  <p>8 家下 流路</p> <p>変容して独自展開</p>	 <p>12 金の尾 18住</p>  <p>13 金の尾 4住</p>  <p>14 塚本 26住</p>  <p>15 金の尾 14方形周溝墓</p>  <p>16 金の尾 18住</p>
中期参考例		 <p>17.18 青梅市馬場遺跡</p>	 <p>19 秩父市下ツ原遺跡1住</p>

図6 茅野地域・甲府盆地への佐久地域の影響（弥生時代後期）

違って切込みがシャープで鋭利な工具を使用しており、佐久盆地で見られる施文具に近い。赤色塗彩がない点は異なるが、茅野地域よりも佐久盆地との濃厚な関わりを示唆しているとみられる。

甲府市塚本遺跡3住では、矢羽状文壺とともに頸部に櫛描波状文をめぐらせ、その上位を（おそらく下位も）ヘラ描沈線で区画する壺が出土している（図6-10）。これは佐久市北西ノ久保遺跡77住出土資料と類似する。今までこの文様構成は注意されていなかったが、今回、群馬県まで拡大して類例を当たったところ、この時期に同じ文様の壺は意外にも行き当たらなかった。私は櫛描波状文の上下をヘラ描沈線で区画する文様構成は佐久地域固有の文様であった可能性が高く、ヘラ描矢羽状文壺とともに佐久盆地から塚本遺跡に到来したものとする。

茅野地域・甲府盆地の甕の独自文様について

後期前葉の茅野地域や甲府盆地には頸部から胴部中位まで山形文状に展開する櫛描文や整然と斜状に垂下する櫛描文を施文する甕も存在する（図6-7・8・12～16）。山形文状に展開する櫛描文は頂点部分に円形浮文を置くこともある。これらは佐久盆地には見られない独自の文様である。

本稿では佐久の胴部中位に乱雑な斜状文をもつ甕が、茅野・甲府盆地に至っては地域的に変容して整然とした配置された文様に発展した可能性を考えた。

（2）後期中葉における佐久盆地との断絶と茅野地域・甲府盆地の独自展開

後期中葉の茅野地域は、南北の折衷様式として成立する橋原式と交流しながらも佐久系箱清水式の小地域圏を維持し続ける。橋原式が伊那市中沢川以北から諏訪湖一円の広い分布を示すのに対して、佐久系箱清水式の分布は茅野市域のみのきわめて狭い範囲に限られる（図5）。

後期前葉に成立した家下遺跡の集落は継続し、その近くには構井・阿弥陀堂・永明中学校校庭遺跡などの後期中葉の集落が集中的に営まれる。当地域で最も集落数・規模が増加した時期と言える。

後期中葉という時期で注目したいのは、佐久では後期Ⅲ期古段階以降甕の主文様として確立される櫛描横羽状文（以下「横羽状文」とする。）である。茅野地域・甲府盆地では同時期にこの文様が確認できない。土器様相からは後期前葉における佐久→茅野・甲府への移入は、中葉に至って遮断された可能性が高いと考えることができる。

ちなみに佐久盆地の弥生時代後期前葉の隣接間の繋がりは、今のところ茅野・甲府とだけで確認されている。同時期に内山峠を隔てて直線距離60kmで近接する群馬県甘楽・富岡地域との交流は今のところはっきりとわかっていないが、樽式2期古段階の中高瀬観音山遺跡30号住の壺にT字文B（櫛描横線文にヘラ描スリットを入れる類）が見られることから、後期中葉当初から佐久—甘楽富岡間の交流が始まっていたとみることもでき、これがさらに後期前葉に遡る可能性も否定できない。

佐久—甘楽・富岡地域間の交流は、南蛇井増光寺遺跡など甘楽・富岡地域における赤彩色壺や口縁部に横羽状文・波状文が施文される甕の継続的な存在からみて弥生後期中葉～古墳時代前期まで途絶えることがなかったとみることができるが、佐久盆地—茅野地域・甲府盆地の繋がりは先述のように横羽状文不在の状況から後期中葉以降はほぼ遮断されてしまったと考えざるを得ない。佐久盆地との繋がりが閉ざされて以降、甲府盆地・茅野地域ともに土器に見られる佐久との類似性はどんどん薄れていき、地域の独自性が強く発揮されていくことになる。

4 甲府盆地における金の尾式の生成

中山誠二・稲垣自由が提唱する山梨県の金の尾式土器様式⁽⁹⁾は、これまで述べてきた諸様相から後期前葉段階では東海東部・相模との緩い繋がりはあるものの、佐久盆地の佐久系箱清水式とのより強いつながりのもとに生じたとは私は考える。

後期中葉の佐久盆地との断絶以降、北は茅野地域、南は東海東部・相模との関係性が強まり、独自の発展を遂げたとみる。

後期前葉以前の状況については、甲府盆地・茅野地域ともに後期最古段階の様相が不明である上に、中期後葉栗林期の交流についても検証されていないため判然としないが、佐久後期Ⅱ期≒諏訪湖南Ⅱ期≒金の尾Ⅰ式2段

階という後期前葉後半に括れる時期に類似する土器に象徴される人の動きのピークがあったと考えることはできる。

山梨県の金の尾式は、後期前葉に南南東に進路をとって相模湾沿岸の大磯町や小田原市など神奈川県西部の酒匂川や金目川流域に到達し、東遠江由来の菊川式と共存する。立花実によれば甲府盆地に共通する甕の山形文や斜状文などの櫛描文の存在がその証拠となっている⁽¹⁰⁾。山梨県への東海東部系土器のルートを考えるうえで参考になる共伴事例である。

なお、埼玉県北西部の後期前葉から中葉の岩鼻式土器と強い関係があるとされる東京都・神奈川県が多摩丘陵一帯に分布する朝光寺原1式土器の甕には斜状に垂下する櫛描文はみられるが、山形状展開の櫛描文はみられない⁽¹¹⁾。よって、甲府盆地―多摩丘陵の関係は無視できないものの、甲府盆地―茅野地域の関係がより濃厚であったことが察せられる。

神奈川県西部への到達ルートについては甲府盆地から精進湖・御殿場を経て至ったルートが有力で、距離的には接するものの多摩丘陵一帯の朝光寺原式との関連は薄かったと考える。

静岡県については、駿河西部では静岡市瀬名遺跡で登呂式と中部高地系櫛描文の甕が共存していることが確認されているほか、静岡市川合遺跡の河川跡でも同じ甕の存在が確認されている。駿河東部では沼津市雄鹿塚遺跡で雌鹿塚式との共存が確認されている⁽¹²⁾。これらも神奈川県西部と同様、甲府盆地を介在してもたらされたと考えられ、弥生時代後期前葉に佐久盆地に端を発して太平洋沿岸に至る南北ラインの弥生人の繋がりがあった可能性を物語っている。

時期は異なるものの図6下段に秩父市下ツ原遺跡の斜格子状、青梅市馬場遺跡には山形状文の櫛描文を持つ中期段階の甕を紹介した。このような甕は静岡県有東遺跡でも確認されている。甲府盆地・茅野地域の


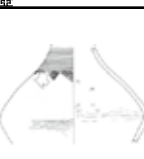


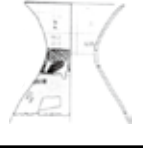


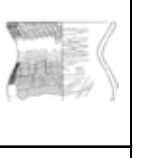























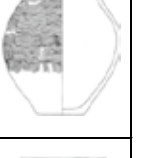




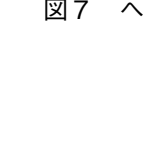
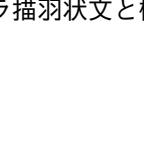
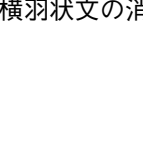





		壺		甕	
弥生後期前葉	I期				
	成立				
弥生後期中葉	II期				
	↑				
弥生後期新	III期古				
	↑				
弥生後期後葉	IV期古				
	↑				
古墳前期前葉	IV期新				
	↑				
古墳前期中葉	I期古				
	↓				
古墳前期中葉	I期新				
	消滅				
古墳前期中葉	II期				
	↓				
				消滅	

図7 ヘラ描羽状文と櫛描横羽状文の消長

後期前葉の文様構成に類似性があり、これらとの関係も今後検証しなければならない。

5 墓制について

不整円形の周溝墓が茅野地域・甲府盆地でもみつまっている。土器と同様、佐久盆地が発信源であると考ええる。

周溝墓の変遷（図8）

佐久盆地の後期前葉前半では、西一本柳遺跡Ⅱに集落に接する単独構成の四隅切方形周溝墓がある。墳丘長6mの小型墓である。中期に遡る方形周溝墓はないので、これが佐久盆地の溝で区画する墓の初源である。四隅切タイプは長野県では佐久地域のみみられる。群馬・埼玉からの影響が濃厚と考えている（図2）。

遅くとも後期中葉前半からは四隅切方形周溝墓に直径8m以下の円形周溝墓が加わり、それぞれ複数が入り混じって墓群を構成するようになる。円形周溝墓は、周防畑B遺跡や県埋蔵文化財センター調査の周防畑遺跡群でみつかったものが現在長野県の最古例であるが、その起源については後期前葉後半までさかのぼる可能性がある。

中葉後半になると円正坊遺跡Ⅳで方台部長12mの四隅切タイプが登場するなどこのタイプの大型化が看取される。これに前葉に引き続き直径8m以下の小型円形周溝墓が加わって、集落に接して墓群構成する。国内最大級床面積150㎡の竪穴住居址が検出された西近津遺跡群の墓域もこれと同様で、未発掘部分に四隅切方形周溝墓が存在していると考えられる。なお、四隅切タイプの方形周溝墓はこの時期をもって断絶した可能性がある。

後葉では今一つ時期が明確でないが、後沢遺跡で墳丘長10m超の方形周溝墓がみつまっている。前代に比して規模は大きくなっていないが、四隅切から一隅が切れるタイプへと変容している。山梨県からの影響が考えられるとすれば、後期後葉後沢遺跡の甲府市上の平遺跡と共通する一隅が切れるタイプの方形周溝墓であるが、この時期佐久盆地では東海東部系土器が確認されていないことが疑問点である。

古墳時代前期では、直径8mを上回る円形周溝墓がみられ、円形周溝墓の若干の大型化が看取される。

同期の方形周溝墓のタイプは様々だが、長野県埋蔵文化財センター調査の北裏遺跡では周溝中央に陸橋を一か所に設けるタイプに統一されている。規模は墳丘長11～13mの方形周溝墓中に、より大型の推定墳丘長16～17mの方形周溝墓（SZ03号）も見られるようになる⁽¹³⁾。低墳丘墓とされる瀧の峯2号墳の墳丘長18mに匹敵する規模である。佐久盆地では古墳時代に入ってもこれ以上の規模の墳墓、例えば墳丘長40m規模の前方後方墳などは確認されていない。私は佐久盆地で大型古墳が発達しない背景が、気象条件であると考えている⁽¹⁴⁾。

6 後期後葉の遺跡分布の減少、古墳時代前期の集落の小規模化と拡散

佐久盆地の弥生時代後期と古墳時代前期の遺跡分布状況を示した（図9・10）。一目でわかると思うが、古墳時代前期には一挙に遺跡分布域が拡大する。

弥生後期の佐久盆地は、後期中葉（佐久後期Ⅲ期新）に集落数・規模ともにピークを迎え、西近津遺跡群では日本最大級を誇る床面積150㎡の竪穴住居を有する一時期50軒を超える大きな集落やそれよりもやや小ぶりの集落もいくつも営まれる。

これが後期後葉になると集落数が減少する。ただし減少するものの、北一本柳・西一本柳遺跡に象徴されるように環濠内への集住が進む。両遺跡の環濠は北一本柳遺跡で東西370m、南北200m、西一本柳遺跡で255m、190mと大規模で、内部には竪穴住居が密集している状況が見て取れ、集落規模はきわめて大きい。

古墳時代前期になると従来集落が営まれなかった海拔900mを超える軽井沢町など高冷地や未開拓の空白地にも集落が拡散して分布するようになる。これらの集落は概して小規模で、竪穴住居10軒未満の集落が多いのが特徴で、なかには1～2軒程度の集落もある。

佐久盆地は後期後葉の大規模環濠内への集住から古墳時代前期には一挙に広域に拡散して分散居住するという大きな変貌を遂げる。

佐久盆地の後期弥生集落の変遷については、表2に示した通りで諏訪盆地の弥生後期～古墳時代前期の集落の推移を比較すると、上述のように盛衰のパターンが類似している。両地域はいずれも海拔700mを超え、長野県








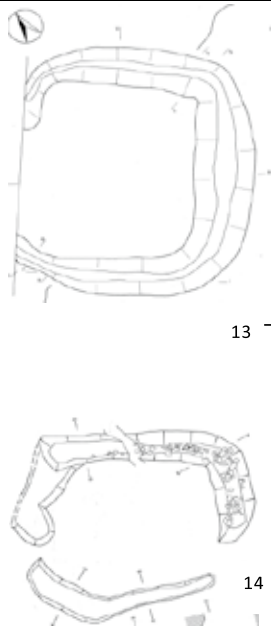
	方形周溝墓(四隅切)	円形周溝墓	方形周溝墓(四隅切以外)
弥生後期前葉	 <p>1 西一本柳区 4号周溝墓</p>		
弥生後期中葉	 <p>2 周防畑遺跡群510号周溝墓</p> <p>3 円正坊Ⅳ 11号周溝墓</p>	 <p>4 周防畑B 2号周溝墓</p> <p>5 周防畑遺跡群 507号周溝墓</p> <p>6 円正坊Ⅰ 2号周溝墓</p> <p>7 西近津遺跡群 5001号周溝墓</p>	 <p>8 西近津遺跡群4001号周溝墓</p>
弥生後期後葉	<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> 四隅切 断絶 </div>		 <p>9 後沢 1号周溝墓</p>
古墳時代前期	<p>前方後方形墳丘墓</p>  <p>15 瀧の峯2号墳</p>	 <p>10 下小平 1号周溝墓</p> <p>11 久保田1号周溝墓</p> <p>12 久保田3号周溝墓</p>	 <p>13 下小平2号周溝墓</p> <p>14 久保田 2号周溝墓</p>

図8 佐久盆地の周溝墓の変遷

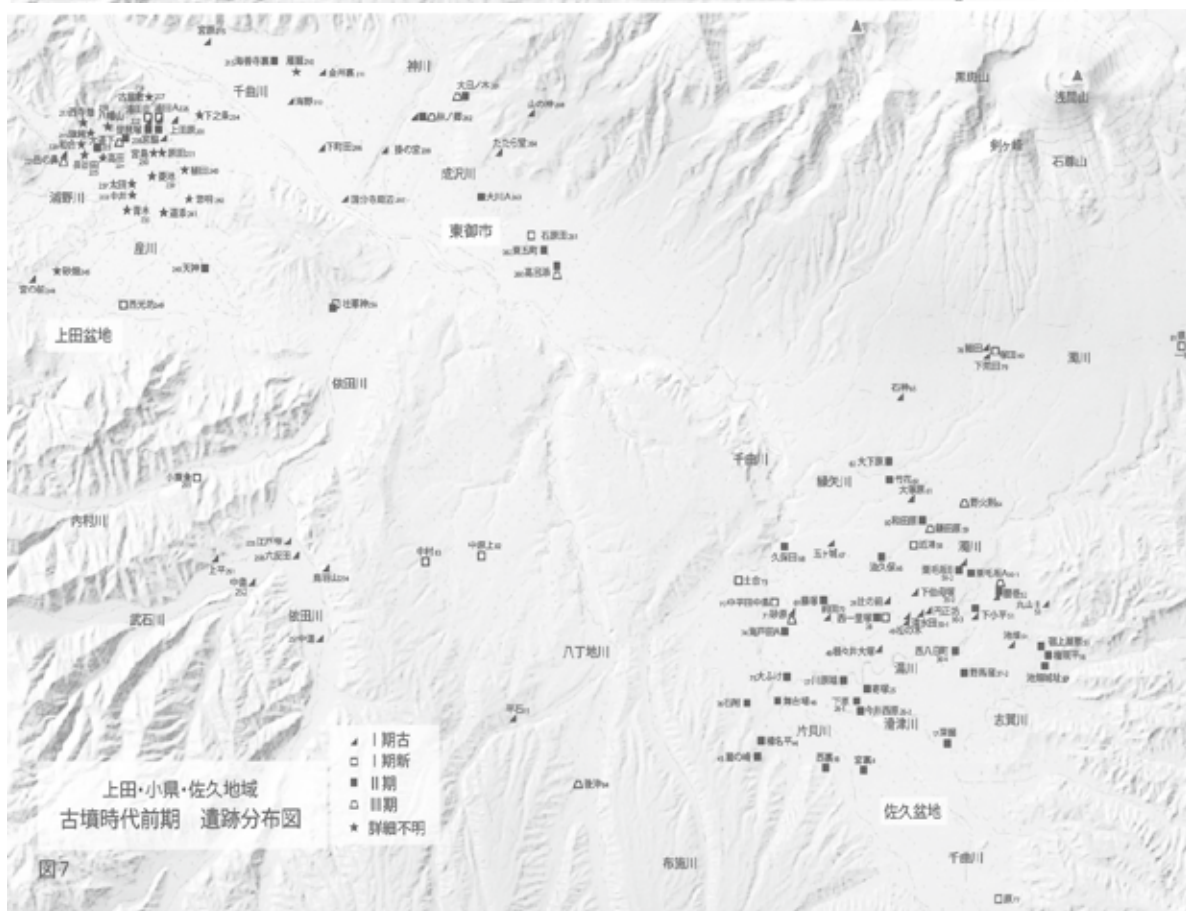
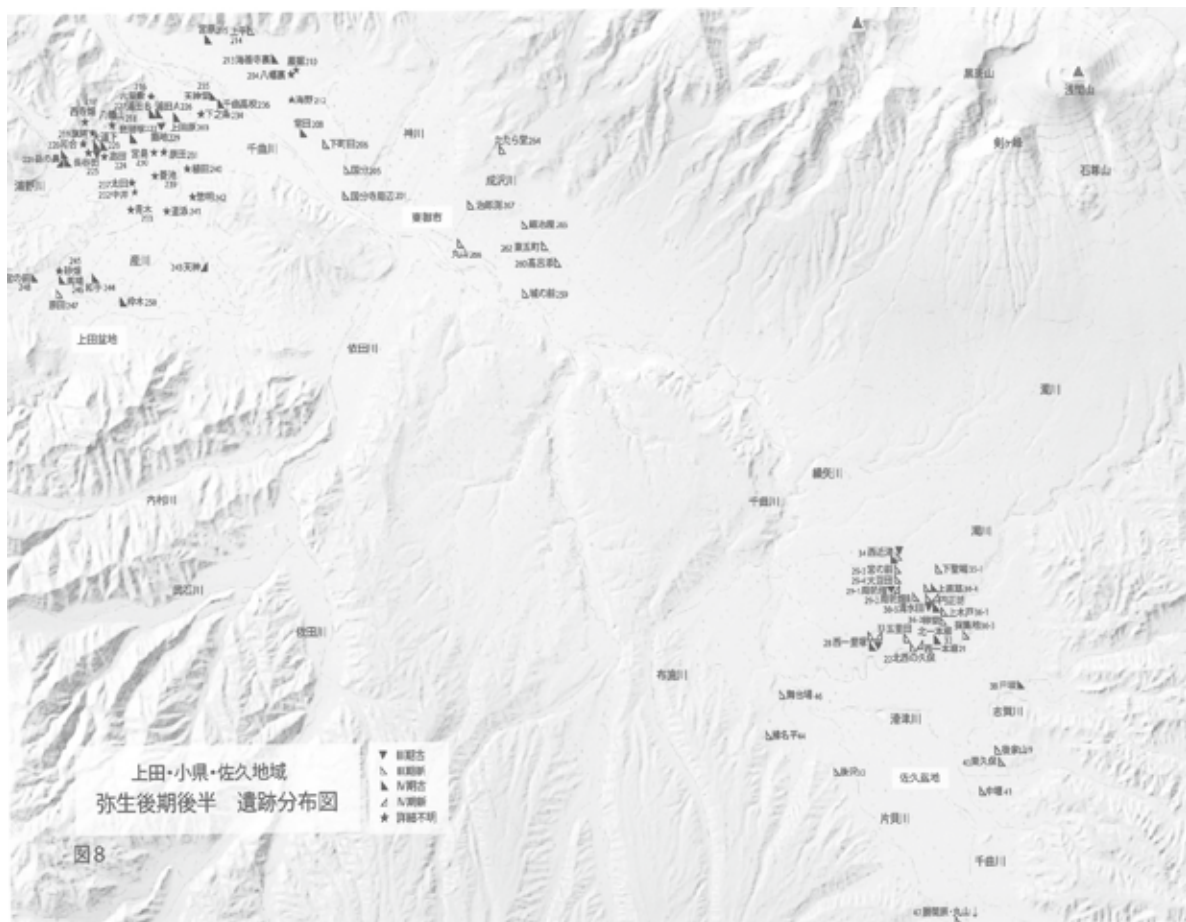


図9 佐久・上小の弥生後中～後葉と古墳前期の遺跡分布を比較



図10 佐久・上久の弥生後中～後葉と古墳前期の遺跡分布を展望図で比較

第2表 佐久盆地と諏訪盆地の弥生後期～古墳前期の集落の推移

佐久	後期前葉—小規模・ごく少数	後期中葉—大規模・多数	後期後葉—大規模環濠・少数	古墳前期—小規模・多数・拡散
諏訪	後期前葉—小規模・ごく少数	後期中葉—大規模・多数	後期後葉—小規模・少数	古墳前期—小規模・多数・拡散

内の盆地の中でもひととき高冷地である。そして、佐久・諏訪盆地いずれも後の時代に前方後円墳・前方後方墳などの大型古墳が未築造の地域という点でも共通する。

神奈川県相模川・金目川流域では弥生後期後半～古墳時代前期の大規模集落遺跡が濃密に分布する地域に大型古墳が築かれることを山口正憲が指摘しており⁽¹⁵⁾、佐久・諏訪地域の古墳前期集落の小規模化・拡散現象そして大型古墳の未築造状況は、その逆パターンをあらわしていると思う。

また、私はこの現象の背景には弥生後期～古墳時代の気候寒冷化が大きな影響したと考えている。気候寒冷化は、食糧生産に重大な影響をもたらしたに相違なく、大型古墳築造には到底至らない経済的な事情があったと考えている。

甲斐鉾子塚古墳など曾根丘陵地帯を中心として、巨大古墳が築造された甲府盆地には、それに相応しい大規模弥生後期集落が存在するものとする。

7 鉄剣・鉄釧・ガラス小玉の動き

佐久盆地は北信や群馬県北部と同様、弥生後期中葉以降の墓に刃関双孔鉄剣（これについては鹿角装であったという見方が強い）、らせん状鉄釧、ガラス小玉を副葬する地域である。今までこれらについて、私は日本海ルートで北信に入った威信財が、佐久盆地に交換あるいは贈与されたものと考えていた。しかし、らせん状鉄釧を詳細に分析した平林大樹の研究成果⁽¹⁶⁾により、別ルートも併せて考えなければならない状況となった。

佐久盆地で出土した3遺跡（五里田・後家山・西一里塚）らせん状鉄釧の帯金はいずれも幅広で平林の分析では関東圏に属する。

幅広の帯金は、後期中葉～後葉にかけて北陸系土器を受容しない地域（佐久盆地、群馬県甘楽富岡地域？、埼玉県荒川中流域右岸地域（吉ヶ谷式分布圏）、南関東）に分布しているように見える。一方、幅狭の帯金は、後期中葉～後葉にかけて北陸系土器を受容する地域（長野・上田地域、群馬県渋川地域）に分布しているように思える。佐久盆地のらせん状鉄釧は、北信の鉄釧と形態が異なることが判明したことから財の流通ルートについても北信一辺倒でなく、東海・関東も供給の有力地として検討しなおす必要性に迫られている。

8 結語

本稿では、後期前葉に類似する弥生土器を共有している甲府盆地と茅野地域の起源地が、矢羽状文壺の比較検討から佐久盆地であった可能性が高いことを指摘した。

また、弥生後期中葉には佐久盆地でもっぱら用いられる甕の横羽状文が甲府盆地・茅野地域では確認できない状況であることから、佐久盆地と甲府盆地・茅野地域の繋がりは後期前葉までで中葉には遮断されたのではないかと推定した。

従来、茅野地域や山梨県甲府盆地一帯に拡散した中部高地型櫛描文土器については、佐久盆地との関連が指摘されながらも、具体的に絞り込む作業はなされて来なかった。当然のことながら佐久地域の後期弥生土器がいつ他地域に影響を与えたのか、そのきっかけは何にあったのかについても検討されて来なかった。これは偏に佐久盆地の研究者の怠慢に原因があるが、今回ようやくその研究の緒に就くことができた。

現状では、弥生時代後期における佐久―甲府・茅野間の繋がりは佐久からの一方通行であることしか確認できていないが、甲府・茅野から佐久へ齎された文物がなかったのか今後検証する必要がある。

また、時期が下るにしたがって甲府盆地における分布範囲を拡大させ、一遺跡内における土器の量的比率も増して巨大古墳が築造される時代への橋渡しをしたであろう東海東部系土器⁽¹⁷⁾の起源地が何処であったのか、遠江・駿河・相模地域の土器等を勉強して考察してみたいと考えている。

中期後葉の状況については本稿では、全く検討していないが、この時期には佐久・諏訪・甲府盆地にそれぞれ栗林式土器が分布しており、後期前葉に先駆けて様々な地域間の繋がりがあったものと考えられる。一例としてこの時期に甲府盆地から茅野地域へ波及した五平柱をあげることができる。その他の要素についても今後検討

し、解明していかなければならないと考えている。

本稿は、2016年10月2日山梨県立埋蔵文化財センターで行った研究会の発表内容をまとめなおしたものである。発表の機会を与えていただいた稲垣自由氏、中山誠二氏、甲府盆地・諏訪盆地の資料観察の機会を与えていただいた小林健二氏、保坂和博氏、一之瀬敬一氏、鷹野義朗氏、児玉利一氏、山田武文氏に感謝申し上げる。

註

- (1) 笹澤 浩 1986「箱清水式土器の文化圏と小地域」『歴史手帖』第14巻2号 甲府盆地の金の尾遺跡の箱清水式土器に対し「・・・三六号住居址出土の壺は周防畑遺跡に頸部文様は似るなど、千曲川をさかのぼった人の移動があったものであろう。」と評価している。卓見である。
- (2) 拙稿 2016「前方後円墳未築造地域における弥生から古墳時代前期の集落」『専修考古学』第15号 32-46頁
- (3) 山下誠一 2001「上伊那地方南部の後期弥生土器」『長野県考古学会誌』93・94号 89・90頁 伊那市小黒川・三峰川を境にして南を座光寺・中島様式、北を橋原様式としている。
- (4) 諏訪市 1995「第3章 弥生時代の諏訪 (5) 大安寺遺跡」『諏訪市史上巻 原始・古代・中世』368-372頁
諏訪市教育委員会児玉利一氏のご厚意により、資料を実見させていただいた。大安寺遺跡17・18号住居址から橋原式Ⅰ期の土器が検出されている。
- (5) 小池岳史 1999「諏訪地方の弥生土器」『99シンポジウム長野県の弥生土器編年』長野県考古学会弥生部会 24-26頁 4 後期の土器編年で橋原式との違いを述べた。
- (6) 拙稿 前掲註1 48頁に弥生時代後期前葉(Ⅱ期)は「佐久盆地全体にわたる開発が開始された時代」と記載した。
- (7) 小橋健司 2014「東京湾東岸における弥生時代後期後半の様相」『久ヶ原・弥生町期の現在』66-70頁 「・・・古気候研究の中には、紀元1世紀前半の寒冷期から温暖化に向かい、2世紀後半に冷涼湿潤、再び回復するという変動を指摘するデータがあり、・・・これらに照らすことによって、中期末・後期初頭の北関東要素の南下、後期後半の湾口部要素の北上、という東岸の動向は、おおまかに気候変動に対応する可能性が浮かぶ。」と指摘しており、佐久系箱清水式の南下も北関東の動きとリンクする可能性もある。
2015「気候変動と房総の弥生社会」『列島東部における弥生後期の変革』63頁 「・・・1世紀前葉と2世紀後葉は古気候データから急激な寒冷化が起きた時期と推定でき、後者には火山噴火による影響も加わった可能性も考えられる。」としている。
- (8) 小池岳史 2010「諏訪湖南地域の後期弥生土器」『中部高地南部における櫛描文土器の拡散』山梨県考古学協会 45頁
- (9) 中山誠二 1999「弥生時代の編年」『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物) 山梨県
稲垣自由 2015「甲府盆地における土器の地域性」『列島東部における弥生後期の変革—久ヶ原・弥生町期の現在と未来』六一書房
- (10) 立花実 2010「神奈川県西部地域における弥生時代後期の土器様相と中部高地型櫛描文土器」『中部高地南部における櫛描文土器の拡散』山梨県考古学協会 8頁 「(大磯町馬場台遺跡)第5地点でも出土している櫛描文を有する甕は・・・胴部上半の櫛描斜行文を特徴とする。・・・より近い事例では山梨県金の尾遺跡出土土器を挙げることができる。」としている。
- (11) 浜田晋介 2009「朝光寺原式の編年と伴出土器」『南関東の弥生土器2』六一書房 65頁第2図中に斜状文が見られる。
- (12) 篠原和大 2010「駿河地域の中中部高地系土器と有東式土器・登呂式土器」『中部高地南部における櫛描文系土器の拡散』46-56頁 駿河の中中部高地型櫛描文土器については、未だ実見していないので調査のうえ推論の精度を高めたいと考えている。
- (13) 2010年6月28日実施の長野県埋蔵文化財センター佐久市北裏遺跡群現地説明会資料を参照した。
- (14) 拙稿 前掲註(1) 76-79頁
- (15) 山口正憲 2005「相模湾—秋葉山古墳群を中心に—」『東日本における古墳の出現』六一書房 69-72頁
- (16) 平林大樹 2016「くろがねの腕輪と碧い玉」『佐久考古通信』115 4頁 3. 鉄釧の分布と流通で指摘。
- (17) 篠原和大 2002「5 遠江・駿河地域」立花実「6 相模地域」『弥生土器の様式と編年 東海編』木耳社
遠江・駿河地域のうち、(2) 東遠江地域 (589-610頁)、(3) 西駿河地域 (646-658頁)、(4) 東駿河地域 (692-696頁)、相模地域のうち金目川流域 (813-825頁) 等が該当地域であり注目していきたい。

参考文献

山梨県

末木健他 1987『金の尾遺跡 無名墳(きつね塚古墳)』山梨県教育委員会 本書の見返しに「1987.9.5 中山誠二氏より」と記載有。本書をご恵与いただいてから29年目にしてやっと恩返し。

高野玄明他 1997『音羽遺跡』甲府市教育委員会

村松 佳幸他 2008『頭無A遺跡』北杜市教育委員会

平塚洋一他 2011『塚本遺跡』甲府市教育委員会

群馬県

井上太 1993『中高瀬観音山遺跡範囲確認調査報告書』富岡市教育委員会

柿沼恵介他 1999『新編高崎市史資料編1(原始古代1)』

大木紳一郎 1997『南蛇井増光寺遺跡Ⅴ』群馬県埋蔵文化財調査事業団

長野県

長野県考古学会弥生部会 1999『長野県弥生土器集成図録』

長野盆地

千野浩 1987『吉田高校グランド遺跡』長野市教育委員会

千野浩 2001『吉田高校グランド遺跡Ⅱ』長野市教育委員会

諏訪盆地

高林重水 1981『橋原遺跡』岡谷市教育委員会

守矢昌文 1983『構井・阿弥陀堂遺跡』茅野市教育委員会

小池岳史 1995『家下遺跡』茅野市教育委員会

小池岳史 1996『家下遺跡Ⅱ』茅野市教育委員会

及川良彦 2015「第三章 自然とともに生きた時代【弥生時代】 第4節 道具と生活」『新八王子市史 通史編1 原始・古代』

追記

本稿では、「矢羽状文」という土器文様・墓の類似性から佐久盆地と甲府盆地・茅野地域の弥生時代後期前葉における直接的な繋がりを想定した。

脱稿後、分布の中心を佐久盆地におく「石囲炉」、「土器敷炉」が甲府市金の尾遺跡、茅野市家下遺跡では「地床炉」や南信系の「埋甕炉」とともに竪穴住居の炉に高率で採用されていることが判明した。佐久と甲府・茅野の繋がりは、竪穴住居の炉の類似性からも証明できそうである。

及川良彦は「炉の多様性が人々の出自集落の伝統を示している・・・」と仮定、「竪穴住居の家の中を覗くと、この家はどこの出（出身地）かわかるような構造であった・・・」と推測し、炉の形態差は集団・出自の違いを表す可能性を指摘していた。甲府盆地、茅野地域の弥生後期集落における前述の事象は、分節集団の混淆を表しているとみてよい。この点については稿を改めて詳述したい。